

少女雑誌の部屋から

展示中の「気になる!!タイトル展」も残すところあと僅かとなりました。今回選んだタイトル中には、名前に「子」が付く人物が多く登場します。「〇子」という名前は平安時代からありましたが、基本的に特権階級の女性の名前で、明治時代後半になると庶民にも広まっていきました。某生命保険会社の調査によると、大正5年～昭和39年は「子」が付く名前が連続トップだったそうです。しかし、名前が多様化して徐々に「子」ばなれが始まり、昭和61年にはついにベスト10から姿を消してしまいました。最近では再び「古風な名前」として選ばれる方もいるようですね。 —古風な名前の担当者より



雑誌紹介 19

明治30年代～昭和40年代に発行された少女雑誌の中から主なものについてご紹介します

詩歌少女 (詩歌少女社/ポエム社書房) 昭和13(1938)年11月号～終刊時期不明

詩人・福田君夫主宰の雑誌。「詩歌と絵画と音楽の抒情雑誌」がキャッチフレーズだったが、後年は作詩と絵画と音楽の指導が主な内容となる。タイトルには「少女」が入っているが、男性の投稿も多くみられた。

紺青 (雄鶏社) 昭和21(1946)年7月号～昭和23(1948)年12月号

雄鶏社は戦後にできた新興出版社で勢いがあり、当時は文芸雑誌も出版していた。対象年齢を少女雑誌よりもう少し上に絞って編集され、「令女雑誌」というサブタイトルがついている。執筆陣には林芙美子、芹沢光治良、西條八十らがいた。

少女雑誌を彩った挿絵画家たち 19

藤井 千秋 (ふじい ちあき) 1923—1985

岐阜県生まれ、京都市育ち。

京都絵画専門学校図案科(現・京都市立芸術大学)卒業後、昭和21(1946)年末『少女の友』に挿絵を描くようになると、またたく間に戦前の中原淳一に代わる人気挿絵画家となった。昭和22(1947)年に中学の教師となるが、挿絵の仕事が認められるようになり、2年で退職。

昭和30(1955)年、『少女の友』休刊後は『女学生の友』、『小説ジュニア』、『ジュニア文芸』等、ジュニア小説の挿絵で活躍。清潔感あふれるみずみずしい少女のイラストは、昭和30年代の少女たちに絶大な人気を誇った。雑誌の廃刊が相次いだ1970年代から挿絵の仕事からは遠ざかるが、晩年まで気高い女性像を描き続けた。

少女雑誌の豆知識

果たせなかった約束

昭和23、24年頃、挿絵画家の藤井千秋は『少女の友』で人気を博していました。その当時、千秋は住まいのある京都の出版社・大翠書院で仕事をしていたのですが、同会社に勤めていたのが瀬戸内晴美(寂聴)でした。瀬戸内は昭和25年、『少女世界(富国出版社)』に少女小説を書いてデビューしました。

「藤井千秋の画集がでるときには帯文(推薦文)を書く」と言っていたそうですが、残念ながら画集が出る前に千秋は他界し、その約束は果たされませんでした。